

「仕事」の本義

本欄の前二回で私はフロイトの精神分析学のキーワードを「無意識の意識化」とし、これとまことに対照的に森田正馬（ましま）の療法学のキーワードを「意識の無意識化」として捉えた。そうして後者に少なからぬ共感を示した。もう少し述べてみよう。それでは療学家としての森田は、いかにして症者の「意識の無意識化」を図ろうとしたのか。

森田は、神経症者の精神と現実との接点に注目し、現実が精神のありようを規定する方位を見定めた。そして精神を規定する現実を「仕事」に求めた。人間の心身機能の発達は子供にあっては遊びであり、長じては仕事に移る。人間はこの世に生を享けて以来、厳しい現実の中で嘗々と生を紡いできた。それを可能ならしめたものが仕事である。仕事によって環境を自己の生存維持のために変革し、変革を求めて人間社会を組成してきた。人間の「生の欲望」を充実させるものは仕事であり、心身機能の発揚がこの仕事の中でなされる、と森田は考えた。仕事とは字義通り「事に仕える」ことであり、人

渡辺利夫（わたなべ）（公益財団法人オイスカ会長）

一九三九年、山梨県生まれ。七〇年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授、拓殖大学学長、総長、学事顧問などを歴任（二〇一〇年十二月退任。二〇一七年六月より現職）。

間が自然に働きかけ自然と合一することができる唯一のものである。活動こそが自然であり、無為は自然に反する。人間の器官はこれを存分に機能させることによって強化され、機能を用いなければ劣化する。活動の中心が仕事である。

療法的にいえば予期恐怖にとらわれて行動を忌み嫌う神経症者に、ともかく一つでも仕事を成し遂げさせ、そうして抑鬱的な気分の中にあっても何事かをなし得たという体験的な自信を与え、心身機能を発揚できたことの爽快を感じさせる。この反復により己の精神の内界をみつめて煩悶（はんもん）の人生を過ごしてきた症者の「即我的」態度を、仕事という具体的な対象の中に没入することによって得られる「即物的」態度へと、つまり内向から外向へと変化させる。症者が仕事に我を忘れるようになった時、症状は嘘のように消滅していることを森田は何度も観察し、仕事を通じてなされる心身機能の発揚が神経症の克服にとっていかに大きな意味をもつかを強く悟ったのである。「意識の無意識化」である。